

特集 東京を支えてきた土木施設

Special Features / Civil engineering facilities supporting Tokyo

# ▶大都市東京とともに

世界の大都市には、必ず都市とともに語られる川がある。ロンドンのテムズ川、ニューヨークのハドソン川、ローマのテヴェレ川などなど。飲料、産業、交通、排水、防衛など様々に川は用いられてきた。都市は川によって創られてきたともいえる。では東京はどうだったのだろうか。

1884 (明治16) 年の文明開化の頃、イギリスの地理書を翻訳する形で『地文新篇』が出版され、教員を養成する師範学校の教科書としても使われた。本文は「両国橋及ビ隅田川」から始まり、潮・水源・雨と、川の起源を遡る形で綴られている。底本となった書籍もテムズ川から始められており、当時、東京、日本を代表する河川として隅田川を取り上げたのである。

しかし、東京を流れる主だった河川には、延長で言えば173kmの荒川、138kmの多摩川、60kmの江戸川と大規模な河川も多い。比べて隅田川は23.5kmと短く、小

株式会社千代田コンサルタント/社会環境事業部/総合計画室 有賀圭司 (会誌編集専門委員) ARIGA Keiji

規模な河川である。なぜ隅田川は東京を代表する河川 になったのだろうか。

### ■隅田川を制する

現在の隅田川は、埼玉県を主な流域とする荒川水系の一部であり、東京都北区の岩淵水門で荒川と分かれている。しかし、かつて隅田川は利根川の下流であり、関東平野一帯を流域とする利根川の水は、隅田川を通して東京湾に注ぎこみ、河口付近の氾濫原には低湿地が広がっていた。

そのため、江戸時代以前は浅草寺や待乳山周辺な ど、川の氾濫に巻き込まれにくい微高地だけが活用され ていた。治水技術の発達していない時代、少し雨が降 れば洪水の危険性がある低湿地では都市は育ちにく く、江戸・東京の成長には、隅田川を制する必要があ った。

このために行ったのが「奥川廻し」である。これは

「利根川⇒隅田川⇒東京湾」という川の流れを、「利根川+鬼怒川⇒太平洋」へと切り替える大事業であった。奥川廻しは1594(文禄3)年、現埼玉県北部の会の川の締め切りから始まった。その後、1621(元和7)年の赤堀川の初開削以降、1643(寛永20)年までの逆川・江戸川の開削、1654(承応3)年の赤堀川の増削を経て、利根川は太平洋に流れるようになった。

奥川廻しは、伊奈忠次等によって行われ た江戸初期の代表的な土木事業であるが、

狙いには様々な説があり、物流網形成、江戸の洪水防止、利根川を奥州各藩に備える堀とする、近傍を通る日光街道の浸水対策など、関東全体に対するものから、局所的なもの、また治水から物流まで多様である。今となっては、局所的な治水対策が積み重なった結果なのか、大きな目標を狙い定めて事業を積み重ねたのかが判然としない。しかし当初の狙いが何にせよ、奥川廻しにより隅田川は制され、水路網も大きく変化し、物流網の活性化につながっていったのである。

## ■江戸の物流と橋の守り手

奥川廻しの完了後、江戸に向かう水運の経路は、東京湾を経る「海手」と利根川を経る「奥川」の2つが形成された。

「奥川」は特に東北方面とのつながりが強かった。東北からの物資は海舟により利根川河口に到着すると、高瀬舟などの川舟に積み替えられた。河川舟運は、1隻で江戸に運ぶ海上と異なり、地域の物流業者が短区間を輸送するリレー方式であった。積み替えが発生するものの、地域の流れに詳しい地元の船頭が輸送する方が確実であったのである。

川舟に積み替えられた物資は、利根川を北西に遡り、関宿で江戸川に入ると一路南下。そして江戸川下流から中川を経て船番所に到着する。中川船番所は小名木川の東端に位置し、江戸に出入りする船の関所であった。夜間の出船は禁止などの規定がある一方、「通ります通れ葛西のあうむ石」と詠われたようにルーズな部分もあった。これは地元の船頭が多く、番人と顔馴染みであったせいもあるだろう。

一方、東北からは房総半島を回り、一度伊豆下田や 相模三崎に停泊し、西南風を待って江戸に向かう「海 手」もあったが、海上輸送のリスクや大型船が必要であ ること、また関東一円の物資は川舟を活用していたた



図1 『地文新篇』の目次



写真1 周辺から一段高くなっている待乳山聖天



図2 隅田川周辺図(1700年初頭)

め、積み替えの手間はありつつも、「奥川」の地位がゆらぐことはなかった。

「奥川」「海手」はいずれも隅田川を終着点とし、そこで がに 積み替えて 江戸中に 搬送された。 隅田川の役割は、 輸送経路という以上に、 江戸の物流ターミナルとして 全国からの物資を市中に仕分けることだったのだ。

これら小口の運送は、河川問屋・艀下宿と呼ばれる輸送業者が担っており、特に小名木川沿いの業者は、同時に両国橋の水防役を委ねられていた。架橋技術が未発達の江戸期は、大水の際に川中に立てられた橋脚が流失する危険性が高かったため、 鷲口を使って流木

OO8 Civil Engineering Consultant VOL286 January 2020 009

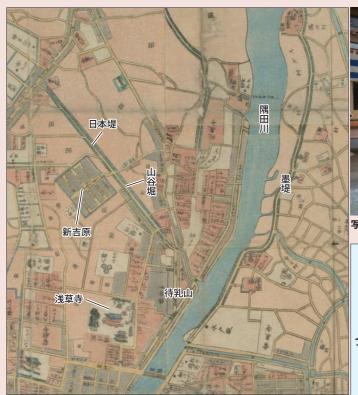


図3 隅田川の日本堤と墨堤(1850年前後)

等から橋脚を守る水防役が必要とされた。この役目を 負う代わりに「奥川」の荷物を江戸各所に運搬する権 利を幕府に保証してもらっていた。

## ■隅田川の堤防

奥川廻しや水防役とともに、堤防の整備も行われた。 1619 (元和5) 年8月に大水で浅草下谷や本所が被害 に遭い、翌年には「日本場」が築かれた。新吉原と隅田 川をつなぐ山谷堀に沿って築かれた延長約870m、高さ 約3mの堤防であり、堤の端部は江戸以前から微高地 であった待乳山とつながっている。日本堤は対岸に既 にあった「墨堤」とともに、待乳山を要として上流側に 開いた扇を形成し、扇の上流部を一種の遊水地とする ことで江戸を水害から守る仕組みであった。また日本堤 整備の同年、神田川が開削され、その土を神田川沿い に盛った柳原土手を設けることで、二重の防御とした。

#### ■ 隅田川に住み、隅田川で競う

近代に入っても水運は重要な役割を果たし、神田川 沿いに秋葉原駅と飯田町駅 (現飯田橋駅)、隅田川沿 いに隅田川駅など、水運の便の良い場所に鉄道駅が整 備された。同時に鉄道から艀に物資を積み替えて東京 市中に搬送する人々が登場したのだが、彼らの主な住



写真2 中川船番所(中川船番所資料館の再現ジオラマ)



図4 明治時代のボート競技のコース。浅草側の浅瀬は現在の隅田公園

まいは実は川であった。

大正から昭和にかけては「セジ」と言われる艀の2 畳ほどの空間に、家族2~3人で生活する者が多く存在 した。1925 (大正14)年の国勢調査によると、東京の艀 が6.458隻、水上生活者が1万6.569人も存在していた。 これらの人々は荷役の仕事に応じて東京中を移動した ため、生活環境、特に教育が問題となっていた。例えば 午後子供が学校から戻ると家(解)がなく、東京中の河 岸を探し回り、ようやく深夜1時に親元に戻れたという 話もあり、のちに水上生活者用の寮形式の学校が設立 されるに至った。

また、隅田川は大船小舟の行き交う輸送路であると 同時に、都市民に最も近しい水辺でもあった。江戸時代 から川沿いは行楽の場であり、墨堤の桜並木は今に至 るまで花見の名所となっている。そして、明治期には水 泳などのスポーツも盛んに行なわれていた。水上に飛び 込み台を設けた船を係留して水練場とし、解の通る脇 で川に飛び込む姿が多くみられた。

さらに盛んであったのが、ボート競技である。幕末に 欧州から入ったボート競技は明治には大学に普及し、大 学対抗レースも行われるようになった。川沿いには各大

学の艇庫も設置され、吾 妻橋付近の水面がその 中心地であった。1899(明 治31) 年のボート競技は 「…少壮血気の士源平須 磨の戦にも比すべき勇気 を鼓舞しつつ、青白赤黄 各自の艇に目印を置き互 いに勝を争う端艇競漕 は隅田江畔観客の多き を致す一大勢力…|とい ったレースとそのにぎわ



写真3 1954年ケンブリッジ大学を招いてのレース風景 写真4 観光名所も多い隅田川沿川

いの景色を伝えている。しかし、隅田川でのボート競技 は時代とともに下火となっていった。川辺には今も1954 (昭和29)年に行われたレース風景が刻まれた石碑が あるが、実はこの頃には水質悪化が懸念されていた。

もともと勾配が緩やかな隅田川では、岩淵水門から 河口まで水が流れるのに3~4日かかり、汚染が進みや すかった。昭和に入ると化学工場や染色工場などが沿 川に立地し、5mg/ℓ以下が望ましいとされるBOD(生 物化学的酸素要求量) 値は、1940 (昭和15) 年に10mg/ ℓ、1955 (昭和30) 年頃には40mg/ℓに達し、1961 (昭 和36)年には早慶レガッタレースも中止となった。川から は有毒ガスが発生し、両岸の家々は窓を開けられず、近 くの問屋の真鍮製品が10日で黒ずんだともいわれる。

対策が本格化したのは、1964(昭和39)年の東京オ リンピックが契機であり、区部全域で下水道整備を急 速に進めるとともに、工場排水の基準設定や下水処理 場整備により徐々に改善がなされ、1978 (昭和53)年に は早慶レガッタが再開されるに至った。

### ■江戸、東京、これから

江戸が都市として本格的に成長しはじめたのは家康 が拠点としてからである。家康が関東に転封となったと き、北条氏の拠点であった小田原でも古都鎌倉でもな く、江戸を本拠に選んだ。その理由は秀吉の勧めとも、 土着勢力との軋轢とも言われるが、大坂(大阪)に倣っ たとも考えられる。

大坂は、淀川の下流に位置し大坂湾に面した水運の 要衝であり、淀川上流には「淡海之海」とも呼ばれた琵 琶湖がある。その琵琶湖は敦賀を通じて日本海ともつ ながっていた。江戸はと言えば、隅田川下流で東京湾に 面し、加えて奥川廻しにより「香取之海」と呼ばれた霞 ケ浦を通じて東北とつながる可能性があった。隅田川

があってこその選択だったのではないだろうか。

ここまで奥川廻しから水運、そして水上生活、スポー ツと隅田川を巡る様相を紐解いてきたが、江戸市中の 水路整備や震災復興・戦災復興との関連をはじめ、隅 田川や周辺の水辺には様々な人の想い、活動の歴史が 詰まっている。水運やスポーツが盛んではなくなった現 在も、観光客の増加とともに隅田川周辺はにぎわいを見 せ、浅草・スカイツリー周辺で新たな水辺空間の整備も 進みつつある。奇しくもその場所はボート競技でにぎわ いをみせた吾妻橋の周りであり、待乳山や江戸を水害 から守った墨堤・日本堤にもほど近い。

隅田川は江戸・東京、そしてそれ以前からこの都市を 造り上げてきた川であり、今もその痕跡を各所にみるこ ともできる。今後とも隅田川は東京とともにあり続けて いくだろう。その中で、隅田川と東京はどのような顔をみ せていくのか、これからも楽しみにしていきたい。

### く参考資料>

- 1) 『寶永御江戸繪圖』 喜多川草鳥 1853年 蔦屋吉藏 国立国会図書館デジタルア -カイブス蔵
- 2) 『安政改正御江戸大絵図』 高井蘭山 1858年 出雲屋万次郎・岡田屋嘉七 国 立国会図書館デジタルアーカイブス蔵
- 3) 『地文新篇』 西邨貞 1885年 金港堂 国立国会図書館デジタルアーカイブス蔵 4) 『端艇競漕』 遠山熈 1899年 博文館 国立国会図書館デジタルアーカイブス蔵
- 5) 『水環境保全技術研修マニュアル』 社団法人海外環境協力センター 2005年 6) 「水の都市 江戸・東京 | 陣内秀信・法政大学陣内研究室 2013年 講談社
- 7) 『江戸の開府と土木技術』 江戸遺跡研究会 2014年 吉川弘文館 8) 『都市 江戸に生きる』 吉田伸之 2015年 岩波書店
- 9) 『東京の歴史2 通史篇2』 池享 櫻井良樹 陣内秀信 西木浩一 吉田伸之 2017年 吉川弘文館
- 10) 『東京の歴史5 地帯編2』 池享 櫻井良樹 陣内秀信 西木浩一 吉田伸之 2018年 吉川弘文館

### <取材協力・資料提供>

1) 江東区中川船番所資料館

#### <図・写真提供>

図1 参考資料3)

図3 参考資料2) 図4 参考資料4)

P8上、写真1、2 有賀圭司

写真3 塚本敏行 写真4 加地智彦

010 Civil Engineering Consultant VOL 286 January 2020 Civil Engineering Consultant VOL.286 January 2020 011